

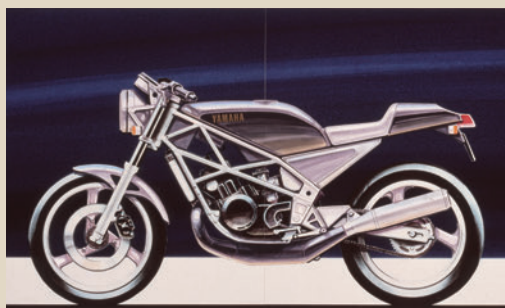
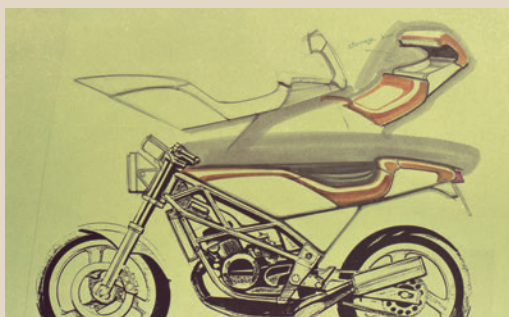
SDR

1987年 / 市販車

1980年代、レーサーレプリカのブームにより、国内市場では250ccと400ccクラスで熾烈な性能開発競争がライバル社との間ではもとより、社内においても2ストロークを凌ぐ4ストロークモデルの開発など、チーム間の競争意識も過熱していった。

モデル開発は先々を見据え、市場開拓や販売台数の目標等を織り込んだ計画に則り、数多くの企画案の中から厳選されていくが、SDRは195cc 34ps 9,000r/minとスペックこそ特筆するものは無いため、当時の潮流から比較評価され、一旦は開発モデルの選定から外れるも、水面下でのデザイン含めた熟成活動の末、プロトタイプモデルは役員含めた審議で高評価が得られ、改めて開発の承認が行われることとなった。

究極のスリム・軽量・コンパクトを象徴する、軽量かつ高剛性のトラス構造のフレームを中心に、特徴的な外観部品となったアルミ製エアクリナーボックス、体に吸い付くようにフィットする燃料タンク、シングルシートの構成となっている。外観上の個性的な構成表現や、メッキや素地の活かした美しい表面処理に加え、《折り畳んだ時にフレームの外に飛び出さないキックペダルの構造》は、ヤマハならではのエンジニアとデザイナー両者のこだわりが結実したディテールといえる。



COMMUNICATION
PLAZA